

# 学生が遠隔授業に対処していく過程

－修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて－

相模 健人

愛媛大学教育学部

## The process of coping with students taking remote learning. Using the Modified Grounded Theory Approach.

Takehito SAGAMI

Faculty of Education, Ehime University

### I. はじめに

中国の湖北省武漢市で2019年12月以降、病原体不明の肺炎患者が確認され、新型コロナウイルス(2019-nCoV)による肺炎だと判明し(富士フィルムHP, 2020)、翌年1月からわが国でも感染者が認められる(ミクスOnline, 2020)ようになった。その影響は現在まで様々に及んでいる。中でも大学教育においては令和2年度よりインターネットを活用した遠隔授業を始める大学が増えている。教員が講義を配信し、学生が視聴する環境の確保や講義内容などの課題があり、大学の運営を根底から見直すときではないかとの報道もある(前田, 2020)。遠隔授業では各種のビデオ会議システムを用いて、同期型、非同期型等、様々に行われている。これまで遠隔授業については植野他(2001)や小池(2001)といった実践はあるものの、大学教育においては一般的なものとは言えず、教員、学生のほとんどがともに初めての経験となった。筆者は遠隔での相談(相模, 2011, 長尾他, 2011)の経験はあるものの、遠隔授業は初めてであり、戸惑いつつの実践となった。

本研究では教育学部における教員免許取得のための必修授業「教育相談論」の授業において同期型の遠隔授業を行い、学生の自由記述による感想を調査し、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(Modified Grounded Theory Approach, 木下, 2003, 以下M-GTA)を用いて分析し、遠隔授業を受ける学生の対処と成果について検討することを目的とした。

### II. 授業について

#### 1. 対象授業

筆者の担当する「教育相談論」の授業を対象とした。開講時期は令和2年度前期にあたる2020年4月から7月、全14回であった。本授業は教職科目Aに属し、教職免許取得の必修授業である。受講対象者は教育学部2回生となり、受講登録者数は177名(平均出席者数156.15名)であった。

#### 2. 授業内容及び従来からの変更内容

①従来の授業内容…もとの授業内容は筆者のスクールカウンセラーの経験を活かした、実際の事例をもとに教員の対応を学生での小グループでの討論を行った。その後、実際の事例での対応を学生の劇形式の発表をもとに考えていく内容が中心であった。ミニシンポジウムも授業内で2回、学生の発表をもとに行い、再履修以外の学生全員が発表を行う形を取っていた。また現職教員に実地指導講師として2回の授業に来ていただき、教育現場の問題や実際の対応を講義していただいた。筆者の講義も事例の解説やチーム学校、スクールカウンセラーやカウンセリングの簡単な考え方などの内容で行っていた。授業評価は毎回「授業評価シート」に出席も含め記入してもらい、学生に提出してもらい、それに応じて授業改善を行っていた。課題については毎週提示し、大学の修学支援システムを用いて学生が提出していた。

②遠隔授業での変更…これに対し、遠隔授業では発表を

廃止して、討論はLINE株式会社が提供するコミュニケーションアプリ「LINE」を使用した。LINEについてはこれまでゼミで指導してきた学生の卒業研究の結果においてSNSの中でも他に比べて使用率が高かったため、採用した。授業最初に筆者とLINEで友だちになってもらい、授業全体のグループに招待した。2・3週ごとにグループ割を学生に送り、各グループを作成してもらい行った。またスクールカウンセリングでの事例については学生にグループに分かれて、劇形式で発表する形式を取っていたため、ほとんどの事例について2週に渡って紹介していたものを劇形式の発表をやめ、1週に縮小し、代わりに1事例追加した。ミニシンポジウムもグループでの打ち合わせが難しいため発表をやめ、学生が自ら調べた文献をもとに討論を行った。実地指導講師、講義、課題については変更の必要がなく行えるため、同様に行った。課題のみ前年度の課題のコピーでの提出を防ぐため、字数を変えている(300字以上350字以内)がこれも毎期変えているので同様である。授業評価はMicrosoft Formsを用いて「授業評価シート」同様のものを作成し、授業終了後に3日間を期限として学生に提出してもらった。これらの授業形式については開始前と授業初回に学生に周知し、学生からの理解を得た上で行った。

### 3. 遠隔授業の方法

授業全回においてビデオ会議システム「ZOOM」を用いて行った。4月中の授業についてはマナトメプログラム(経済産業省, 2020)を用いたウェビナー形式、それ以降は大学のアカウントを用いたミーティング形式で行った。授業を接続トラブルなどで見られなかった学生のために、録画ビデオを授業後にYou Tubeの限定公開で3日間を期限として行った。前述のLINEでの討論内容のまとめや質疑応答をZOOMでのグループチャットの機能を用いて行った。学生のビデオは公開とせず、音声に留めて行った。

## III. 方法

### 1. 調査対象者

最終回出席者117名を対象に有効回答数107名を分析対象者とした。

表1 概念例「仕方がない」

定義	新型コロナウイルスの感染リスクを減らすために遠隔授業は仕方がない
ヴァリエーション(具体例)	対面の方が良い気がするけど、コロナが流行っているからしょうがないな。 コロナウイルスの感染拡大が心配されているので、しょうがないことだと思ったが、遠隔授業は初めてのなので、不安も大きかった。 大学にはいろいろな場所からくる学生や教授であふれており、感染の拡大を防ぐためには仕方がない対応だとは思ったが、授業の進め方もそれぞれで決まっていなくて、何よりも教授側も学生側も慣れていない方法だったためにちゃんと学べるのが不安でしかなかった。 この状況で対面授業を行うのも無理なことだし、仕方がないと思った。
理論的メモ	学生も遠隔授業は新型コロナウイルスの影響を考えると仕方がないと納得している。

## 2. 調査内容

研究目的に沿った調査項目を独自に作成した。

調査内容は「遠隔授業になることを初めて聞いた感想を教えてください」、「遠隔授業を初めて受けたときの感想を教えてください」、「遠隔授業で技術的に苦労したことを教えてください」、「そのことについてどのように解決されましたか?」、「遠隔授業を受けることで心情的に困ったことは何ですか?」、「そのことについてどのように対応されましたか?」、「遠隔授業について慣れてきたのはいつ頃でしたか?どんなことから気づかれましたか?」、「遠隔授業で良かったことはどんなことですか?」、「LINEで討論した感想を教えてください」、「遠隔授業での課題について教えてください」の10問である。

## 3. 倫理的配慮

倫理的配慮については事前に愛媛大学教育学部研究倫理委員会に申請し承認済みである。筆者が研究目的を説明し、同意が得られたものを調査対象としている。

## 4. 結果の分析

調査で得られた回答のうち、明らかに本授業についての言及でない回答は除いて、M-GTAを用いて分析を行った。分析テーマは学生が初めての遠隔授業に対応していく過程、分析焦点者は遠隔授業を受けた学生とした。M-GTAの手順は、まず回答から分析ワークシートを用いて、説明概念を生成した。次に複数の概念からカテゴリーを生成、最後にカテゴリー相互の関係から結果図、ストーリーラインを作成し分析結果をまとめた。

## IV. 結果

M-GTAの結果から、95概念と17カテゴリーを生成した。カテゴリー相互の関係から分析結果をまとめて、簡潔に文章化し(ストーリーライン)、結果図を作成した。以下、概念を『 』、カテゴリーを【 】と表記する。

### 1. 各カテゴリーと概念

結果から一つ概念を例示する。調査結果から、学生は授業が遠隔授業になることを知り、対面授業の方が良いが、

表2 カテゴリー例【遠隔授業はやむを得ない】

定義	新型コロナウイルスが怖いので遠隔授業は仕方がないと考えていること
概念名	概念8『仕方がない』 概念15『学校でやる方が怖い』
理論的メモ	概念8：学生も遠隔授業は新型コロナウイルスの影響を考えると仕方がないと納得している。 概念15：学生は新型コロナウイルスの影響を考え、大規模な対面授業に不安、リスクを感じている。

新型コロナウイルスの感染リスクを減らすためには仕方がないことだと感じている。これらから、遠隔授業になることを仕方がないと感じていることを共通点として、『仕方がない』という概念を生成した(表1)。

さらに『仕方がない』という概念を含み、『学校でやる方が怖い』という概念と合わせて、一つのカテゴリーを生成している。新型コロナウイルスの影響を表すものとして【遠隔授業はやむを得ない】というカテゴリーを生成した(表2)。

このように、概念の生成・修正を繰り返し行い、それに合わせてカテゴリーも生成・修正を行った。101名分のデータ分析を終えた時点で最終確認を行い、理論的飽和に達したと判断し、最終的に95概念、17カテゴリーとなった。

## 2. ストーリーライン(図1)

以下に示すのがM-GTAの最終的な結果となるストーリーライン及び結果図である。

大学での授業が遠隔授業になることを初めて聞いた学生は『授業に対する不安』、『出席に関する不安』、『討論をどうするのか』という授業に関すること、『パソコン、インターネットへの不安』、『ZOOMに対する不安』、『自分の部屋や顔が映るのが嫌だ』といった技術的なことなどの多くの『不安』を抱いている。また授業が始まると『指名されたときにきつい』といった【遠隔授業に対する不安】を感じているが、現在、新型コロナウイルスの影響下にあることで『学校でやる方が怖い』と考え、『仕方がない』と【遠隔授業はやむを得ない】と考えている。

遠隔授業を受け始めた学生は『ZOOMに入れない』、『ZOOMの操作が分からない』、『回線の問題』、『操作性の問題』と多様な問題を抱え、『机のスペースが必要』であり『遠隔授業は忙しい』、『面倒だった』と感じている。『未解決』なことも多く、遠隔授業に『慣れない』学生もおり【遠隔授業の技術的な問題】に直面する。『授業の時間を忘れそう』になり、『疲労感や頭痛』を感じ、『集中しにくい』、『モチベーションを保つのが難しい』、『友達に相談しにくい』という環境下で『学びにつながっているのか』という【遠隔授業の心理的な難しさ】を感じる。さらに【一人ですら】といった『友達に会えずつらい』、『もったいない一年』、『孤独を感じる』といった困難もある。その中で学生は遠隔授業を受けながら『授業者のデメリット』を感じつつ、『担当する先生がおもしろいので動機づけとなった』と【授業者の印象】を抱いている。

これらの困難に対し学生は『早めにZOOMに参加』し、『パソコンを確認』、『インターネット回線の対応』を行い、分からないところは『インターネットで調べる』、『友達に聞く』などした。解決しない場合は『後でYouTubeを確認』するといった【遠隔授業の技術的な対応】を行い、【ストレスコーピング】として遠隔授業を受講する学生は『みんなも同じ』だと考え、『孤独に慣れる』ようにした。加えて学生は『時間に対する意識を高めた』、『学ぶ意識を持つ』、『授業準備』、『環境整理』を行い、授業内では『メモをとる』ことを行い、『課題の確認』、『とにかく課題をこなした』と『頑張った』という【受講努力】を行った。

学生の中には『遠隔授業は経験があった』者もおり『ZOOMに慣れた』、『パソコンの操作に慣れた』といった技術的な問題が解決し、『授業の流れが分かってきた』という【慣れる方法】を用いることで『友達との確認が減った』。学生は『1ヶ月以内に慣れた』、『2ヶ月以内に慣れた』、『3ヶ月前後で慣れた』といった時間の差はあるものの、【遠隔授業に慣れる】ことができた。

このように遠隔授業に慣れていく中で学生はLINEを用いた討論を行う。討論において学生は『LINEは普段から使い慣れているので便利』なので『意見が言いやすい』、『LINEでの討論が活発』となり、『相手の意見の意図を想像する』ことで『討論が協力的で進行が進みやすい』と感じている。『文字に起こすと自分の考えが深まる』、『聴覚障がい者でも討論に参加できる』、『タイピングが速くなった』といったメリットや『討論内容が文字で残る』ことで復習にも活用し、『討論して視野が広がった』という体験に繋がり、【LINEでの討論のメリット】を感じている。一方、『LINEグループ作成の苦勞』があり、『討論がなかなか始まらない』、『文字を打つのに時間がかかる』、『意志疎通が難しい』、『質問しづらい』ことから『LINEでの討論はやりづらい』といった【LINEでの討論のデメリット】もある。

授業後、学生は『課題の把握が大変』であり、『課題が多くしんどい』、『課題が提出されているか不安』になり、『課題提出を忘れる』といった悪循環に陥る【課題の大変さ】がある。

しかしながら遠隔授業を受講した学生は『スムーズな授業』、『工夫されていた授業』、『ちょうどいい課題の量』であり、『意外とできる』、『いつも通りの授業』といった【遠隔授業の手応え】を感じ、『学校に行かなくていいから楽になる』、『通学時間がなくなる』、『遅刻する心配がない』、

『リラックスして受けられる』、『落ち着いて授業を受けられる』、『どこでも受けられる』、『体調が悪いときでも受講できる』と遠隔授業を活用している。また学生は『自分の部屋や顔を映さなくてよい』ことから『身だしなみを考える必要がない』という【遠隔授業の受講しやすさ】の中で『新

鮮で面白い』、『集中できる』、『モチベーションを高く維持できる』と感じ、受講中は『わからないことをすぐに調べられる』、『資料が見やすい』といった【遠隔授業のメリット】を享受している。

以上の結果をまとめたのが図1の結果図である。

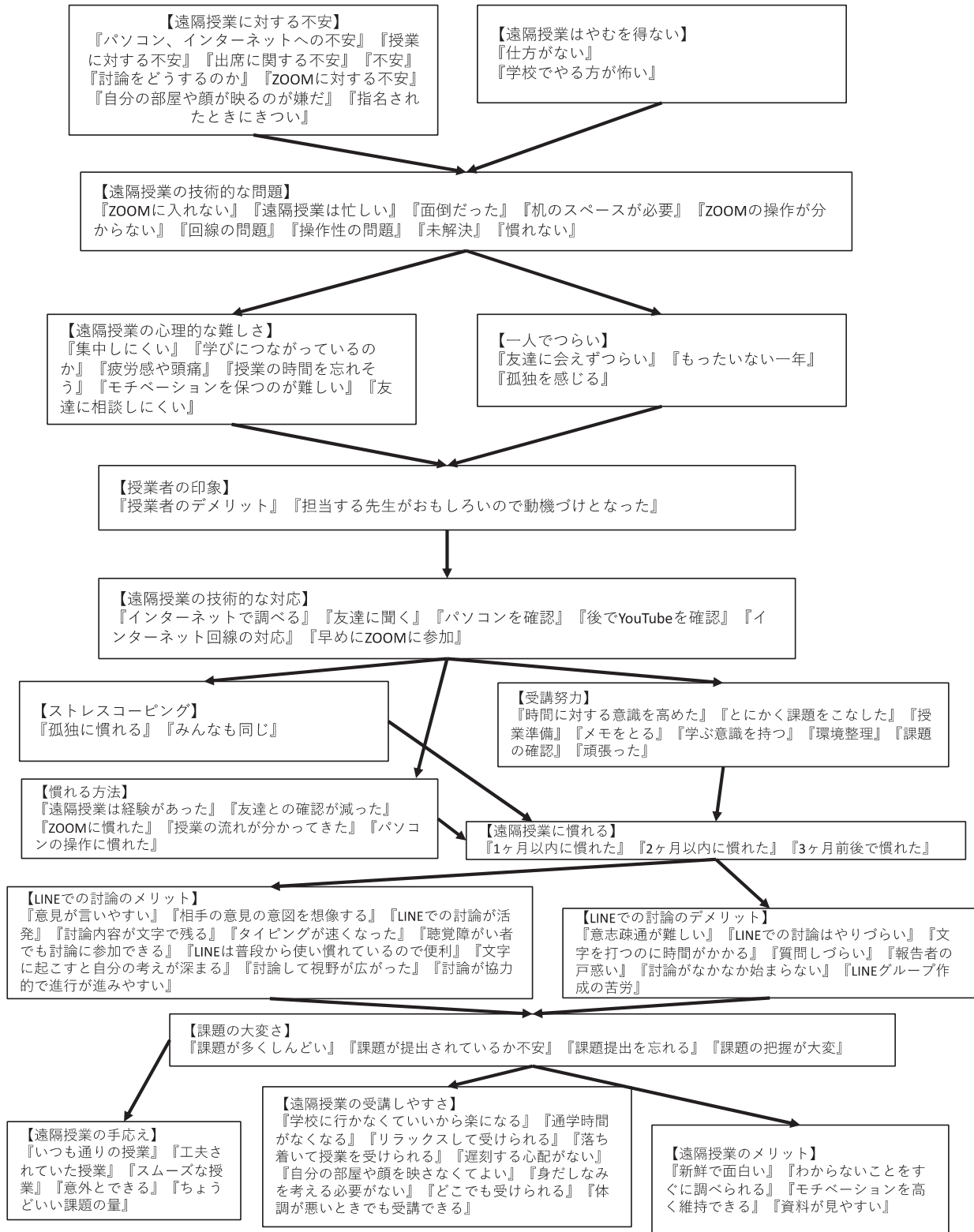


図1 結果図

## V. 考 察

以下、遠隔授業への対処と課題、成果、LINEを用いた討論についてM-GTAの結果をもとに考察を行う。

### 1. 遠隔授業への対処と課題

まず遠隔授業の課題と対処について考えていきたい。課題としてまず言えるのは学生自身が受講環境を自らがコントロールせねばならないということである。M-GTAの結果からも【遠隔授業の技術的な問題】、【遠隔授業の心理的な難しさ】や【一人ですぐ】といった問題は【遠隔授業の技術的な対応】、【ストレスコーピング】、【受講努力】といったカテゴリにあるような学生自身で原則、解決していかなければならず、授業者である筆者が援助できることが少ないと言える。【遠隔授業の技術的な問題】については筆者からある程度の情報提供を行ったが、【遠隔授業の技術的な問題】のカテゴリにある『未解決』、『慣れない』という者も少なからずいる。これらに対しては大学からの援助が更に検討される必要があると考えられる。

これらの課題の対処として学生の社会的資源と考えられるのは友達が挙げられる。遠隔授業となることで『友達に会えずつらい』と『友達に相談しにくい』といった寂しさは当然あるものの、【遠隔授業の技術的な対応】のカテゴリにおいて『友達に聞く』といった対処法であり、【慣れる方法】のカテゴリにおいても『友達との確認が減った』ということから分かるという形で【遠隔授業に慣れる】ことから友達が重要な社会資源であると言える。中村ら(2011)の研究では友人関係が大学不適應に及ぼす影響を検討し、授業理解や友人関係が充実している群が適應的な大学生活を送る傾向、友人関係が偏向している群は大学不適應的な傾向がうかがわれた結果があり、遠隔授業で実際に友達には会えない中でも友達が遠隔授業の適應についても同様の傾向にあると推測される。

もう一つは【一人ですぐ】や【遠隔授業の心理的な難しさ】のカテゴリの『モチベーションを保つのが難しい』、『友達に相談しにくい』、『疲労感や頭痛』といったストレスに対する対応である。これらは【ストレスコーピング】で対処されていると考えられる。ストレスコーピングとは坪井(2010)によればストレスを起こすストレスを解決するため、あるいは心理的・身体的な負担感を減らすために取る何らかの行動である。『みんなも同じ』と認知的再評価型コーピングや、『孤独に慣れる』といった情動焦点型コーピングが用いられていると考えられる。

また、問題焦点型コーピングと考えられる【受講努力】のカテゴリは高い学習動機づけによる対応で行われていると考えられる。また、少数意見ながら『担当する先生がおもしろいので動機付けとなった』もあり、授業者のキャラクターもわずかながら役立っていたと考えられる。

ただし、【課題の大変さ】といったカテゴリについては前述したように従来の対面授業から課題内容は提出方法から含めて、文字数以外は変えておらず、以前に本授業の不推薦の意見の中に「大変だと思います(課題とか)」といった意見があり、従来からと変わらない傾向と考えられる(相模, 2015)。【遠隔授業の手応え】のカテゴリに『ちょうどいい課題の量』という概念もあることから、これは他の受講している授業でも課題が出ていると推測され、授業単体より受講している授業全体での課題の総数が学生の負担となっていると考えられる。

これらから学生はストレスコーピングを行いながら高い学習動機づけで受講しており、遠隔授業に慣れていく者が多いが、技術的な問題についての援助は必要と考えられる。

### 2. 遠隔授業の成果

次に本研究での遠隔授業の成果について考える。ほとんどの学生が初めての体験であったにも関わらず、【遠隔授業の受講しやすさ】や【遠隔授業のメリット】を感じ、順応していつていることは注目に値すると考える。これは学生が【遠隔授業の手応え】として『いつも通りの授業』、『工夫されていた授業』、『スムーズな授業』といった印象を受け、自身が『意外とできる』と感じていることが前提として影響していると考えられ、遠隔授業をいかに行うかが授業者の課題と言える。

【遠隔授業の受講しやすさ】のカテゴリにある『学校に行かなくていいから楽になる』、『通学時間がなくなる』や『わからないことをすぐに調べられる』といった遠隔授業でこそこできる学習姿勢は他の調査(高知大学生のwithコロナ After コロナを考える会, 2020)でも見られるが、『リラックスして受けられる』、『落ち着いて授業を受けられる』といった学生自身が受講環境を調整できることを学生が実感し、『モチベーションを高く維持できる』、『資料が見やすい』や後述するLINEでの討論の『討論内容が文字で残る』ことで復習に用いるといった自らの学習態度を掴みつつあると言える。これについて青木(2005)はe-Learningの導入により、個々の学習スタイルにあった学習環境を提供し、学習者が自分の学習スタイルを認識して、それに見合った学習環境を選択することは、教育効果を最大限にするためにも重要な要素と述べており、学生が自主的にこのような学習スタイルを模索していると言える。

授業開始時には多くの学生が【遠隔授業に対する不安】を感じていたが、遠隔授業を工夫して行うことで前述した不安を払拭し、学生の学習意欲を喚起することができたと考える。

### 3. LINEを用いた討論

授業では学生の討論について、LINEを用いて行った。遠隔授業においてメッセージングソフトを用いた例も見ら

れるが(喜多, 2009), LINE を用いて討論を行った遠隔授業は見られない。

このLINEでの討論について【LINEでの討論のメリット】【LINEでの討論のデメリット】の 카테고리をもとに考察を行いたい。まず【LINEでの討論のデメリット】から考えていくと『LINEグループ作成の苦勞』、『文字を打つのに時間がかかる』、『意思疎通が難しい』といった概念はSNSを活用したことによる弊害とは考えられる。『文字を打つのに時間がかかる』については今後、前もって討論テーマについて考えをまとめておいてもらう準備を学生に課すことである程度、改善されると考えられる。『意思疎通が難しい』については学生もLINEでの討論を見る限り、スタンプ等使いながら意思疎通を図っているものの、今後の課題と考えられる。逆に『質問しづらい』や『LINEでの討論はやりづらい』といった概念の意見は通常の対面授業での授業評価でも従来から見られており、これについては遠隔授業で受けた学生も同様に感じていると考えられる。

【LINEでの討論のメリット】として『LINEは普段から使い慣れているので便利』、『意見が言いやすい』、『LINEでの討論が活発』といった概念については授業者としてのねらいがよく受け取られていると考えられる。『討論が協力的で進行が進みやすい』、『討論して視野が広がった』といった学習効果は従来の対面授業と大きく変わらないと考えられるが、討論の際に『相手の意見の意図を想像する』ことで『討論が協力的で進行が進みやすい』といった面は、学生が問題となっている児童生徒の立場に立つことにも共通しており、教育相談の面からも役立つと考えられる。また、授業者としては意図していなかったが『文字に起こすと自分の考えが深まる』、『討論内容が文字で残る』といった概念は従来の対面授業では得られなかったものであり、SNSで行うことで学生が自身の考えの深まりの気づきを得て、復習に積極的に活用している面が見られる。この点はSNSでの討論の大きな可能性を示唆していると考えられる。また、『聴覚障がい者でも討論に参加できる』といった概念は少数ながらも、今後の聴覚障がい者の討論へのサポートとしての発展性があると考えられる。聴覚障がい者の遠隔授業での報告は除村(2020)があるが、講義における支援であり、自ら他の学生と同様に討論に参加できる意義は大きいと言える。

以上のことからLINEでの討論は対面でのそれと比べても意義があると考えられる。

#### 4. まとめと今後の課題

本研究では遠隔授業での学生の感想をM-GTAを用いて分析することで学生による学習環境の調整や学習スタイルの試行錯誤が学習動機づけの高さに裏付けられていることが分かった。

今後の課題としてLINEでの討論の意思疎通や技術的な問題の対応が挙げられ、遠隔授業の改善が求められる。今しばらく新型コロナウイルスの影響が続くと予想され、よりよい遠隔授業のあり方を探る試行錯誤が続くと推測される。

#### 引用文献

- 青木久美子(2005)「学習スタイルの概念と理論—欧米の研究から学ぶ」『メディア教育研究』2(1), 197-212.
- 富士フィルムHP(2020)「新型コロナウイルスとは? 新型コロナウイルスの感染・予防について」『富士フィルムHP』  
[https://sp-jp.fujifilm.com/hydroag/column/019jokin\\_coronavirus.html](https://sp-jp.fujifilm.com/hydroag/column/019jokin_coronavirus.html) (2020年9月25日確認)
- 経済産業省(2020)「未来の教室～learning innovation～」『経済産業省HP』  
<https://www.learning-innovation.go.jp> (2020年9月25日確認)
- 木下康仁(2003)『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い』弘文堂
- 喜多恵(2009)「遠隔授業におけるメッセージングソフトの活用事例—高大連携取り組みの一事例—」『教育情報研究 Special 巻』129-130.
- 小池浩子(2001)「遠隔授業の抱える課題と効果的授業法—教員のコミュニケーション能力の役割—」『信州大学教育学部紀要』105, 85-96.
- 高知大学生のwithコロナ After コロナを考える会(2020)「高知大学のオンライン授業・自粛生活について—学生版—」『高知大学生のwithコロナ After コロナを考える会HP』  
[https://peraichi.com/landing\\_pages/view/with2020ku](https://peraichi.com/landing_pages/view/with2020ku) (2020年9月25日確認)
- 前田裕之(2020)「新型コロナで広がる遠隔授業 大学教育はどう変わる?」『アンシバSpotlight』  
<https://style.nikkei.com/article/DGXMZO59036890T10C20A5EAC000/?page=2> (2020年9月25日確認)
- ミクス Online(2020)「新型コロナウイルスを日本で初確認 中国滞在歴ある神奈川県男性」『ミクス Online』  
<https://www.mixonline.jp/tabid55.html?artid=68616> (2020年9月15日確認)
- 長尾秀夫, 相模健人, 荻田知則, 山口充, 都筑伸二(2011)「ICT教育相談場面を活用した大学院生の教育相談力の育成」『大学教育実践ジャーナル』9, 83-87.
- 中村真, 松井洋, 田中裕(2011)「大学生の大学適応に関する研究Ⅱ—入学目的, 授業理解, 友人関係でみた対象者のタイプと大学不適応との関連—」『川村学園女子大学研究紀要』22(1), 85-94.
- 相模健人(2011)「ICT教育相談活動における利点と課題: 学生の感想をもとに」『愛媛大学教育学部紀要』58, 55-58.
- 相模健人(2015)「授業の推薦, 不推薦からみる授業評価」『愛媛大学教育学部 平成27年度授業評価報告』<http://www.ed.ehime-u.ac.jp/fd/27/pdf/9.pdf> (2020年9月15日確認)
- 坪井康次(2010)「ストレスコーピング—自分でできるストレ

スマネジメントー』『心身健康科学』6 (2), 1-6.

植野真臣, 吉田富美男, 石橋貴純, 樋口吉之, 三上喜貴, 根本昭 (2001) 「複数クラスにおける遠隔授業の特性分析」『日本教育工学雑誌』25 (2), 115-128.

除村健俊 (2020) 「聴覚障害を持つ学生の支援方法とその応用」『【第11回】4月からの大学等遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム 国立科学情報研究所 HP』

<https://www.nii.ac.jp/event/other/decs/> (2020年9月25日確認)

